
シリーズテレビ局【ギャグな番組へ】

度辺 彩番

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シリーズテレビ局【ギャグな番組へ】

【Nコード】

N2933Z

【作者名】

度辺 彩番

【あらすじ】

シリーズテレビ局で働く10歳天才子役『横宮なうる』。

ある日先輩の『星神ルルア』に呼ばれて…。

なうると6人のバカ騒ぎにどうぞお付き合いください!!

1 お呼び出し。てか、なんで？

ここはシリーズテレビ局。

沢山の人が今日もここで働いている。

その沢山の中には私『横宮なうる』も入る。

そして今、私はこのテレビ局の有名司会者『星神ルルア』待ち合わせをしている。

「キミがなうるちゃんだね？」

よくテレビでみるよ。天才子役はすごいね。」

そう私はこのシリーズテレビ局の天才子役。

わずか5才からデビューし、今の10歳までずっとこの仕事をやっている。

そして彼女は『星神ルルア』。現在十五歳。

このテレビ局の有名司会者だが、自分からも他の人と一緒にゲームに挑んでいくことでも有名。

「はい。私もよく見えています。」

素早く手を出し握手。

「いきなり呼びだして御免ね。」

私は昨日、彼女に手紙で呼ばれたのだ。

けれど、手紙にはなぜ呼んだのか分かる理由が書かれていなかった。だから私は何で呼ばれたのか知らない。

「じゃあついてきて。」

彼女についていく。

「で、なづるちゃん。」

「なづるでいいです。」

相手は年上。しかも先輩だ。
呼び捨てがいいだろう。

「そうか。じゃあ僕のことはルルアでよろしく。」

「…。わかりました。」

『ルルアでいい。』と言ったのには少し驚いた。

「さあ、着いたよ。」

着いたところはスタジオ7。
何でこんなところに…。

「入って。」

入ってみるとそこは暗い中に『ギャグなシリーズ』という番組のセットがあった。

2・ドッキリなんて反則じゃあああいい！

『ギャグなシリーズ』こと『ギャグシリ』。

コな番組にはもちろんルルアも司会者としてでている。そういえば、今考えるとおかしい。

今は7時20分で土曜日。

『ギャグシリ』は6時30分〜7時30分まで、金曜、土曜、日曜日が放送日。

結論として今は『ギャグシリ』の放送中ということになる。

「ねえ。ルルアどっこいしょ?」

「の！」「さー！」「の！」「さー！」

「!？」

掛け声があったかと思えばパツと電気がついた。

そしてパアアアンというクラッカーのいい音になる。

そこにいたのは……

「なつる！おめでとう。今日から君は『ギャグシリナンバー7』だよ！

「よろしく！」

「あの……これは……」

「ドツキだよ！きずけよ！わかれよ！」

今、激しい突っ込みをしたのは突っ込みが激しいということとで有名

な、

『金南ナセル』。

「ねえねえ。怒っているならラウミのことぶっぱたいてえ〜？」

「俺様がはたいてやるしい〜」

パチンっといういい音が響く。痛そうだ。

ちなみに彼らは双子でドmのほう姉の『ラウミ』。
ドsのほう弟の『カウミ』。

「くつくつ。俺のネタくらいかわいい子だぜ。」

彼はまったく面白くないことで逆に売ってしまった芸人の『山海安士』。

「けなしてます？」

「なんでそうなるの?!」

「あら。ホントかわいい子？お嬢さんにしたいくらい」

いや、嫁の間違いだろう。

ちなみにこの人はイケメンなオカマの『萌川ノエリ』。

「ほらなつる自己紹介。」

「あ! ! はい。横宮なつるです。
宜しく願います。」

周りから盛大な拍手がおこる。

「みんな！これからはこの横宮なづるが番組レギュラーだよ！
じゃあ、明日もお楽しみに〜」

スタッフのほうから「お〜」と声があがった。

3・迷子の迷子の西島さん♪

よかった。放送が終わったよ。…って！

「明日!？」

「そうだよ」

学校のこともあるし、家の人も知らないのは…

「ちなみに二日前になつるの両親に許可を取ったから安心して。」

知らなくなかった。

こんど親について家族会議を…

いや、もう今日しようか。

「なつるちゃんー！ー！帰りますよー！」

今、私を呼んだのはマネージャーの『西島古葉』さん。

美人でいい人なのだが、マイペースすぎてよくトラブルをおこす。

「はーい。」

そう言つて西島さんの車に乗り込む。

エンジンがかかり車が動き出す。

「そうそう。『ギャグシリ』の制服は、家に送っておいたから。確認してね。」

「はい。わかりました。」

「その制服だけど、萌川さんがデザインしたみたい。明日会ったつらお礼をお言っておいてね。」

萌川さんは意外にデザイナーとしても名をはせているらしい。

「あら、この道路混んでいるわね。」

でした。西島さんのドジが。

「そこの左をまがるとはいいですよ?」

「あら。そうなの? ありがとう」

こういうミスはよくあるので慣れた。

カーナビを見て答えたただけだね…。

曲がって、またすぐにまた左に曲がる。またミスだつ…

「どうしましょう。」

クラクションの嵐になっちゃったわ…」

どうやら一方通行を逆に入って行ったらしい。
焦って車を出す。

「あれえ〜? ここどこお〜?」

次には迷子だ。

「カーナビを見てください。」

「ああ。ここね。よーしいくわよー！」

本当にこの人は大人なのだろうか…。
そして走ること十分。

「ほら、ついたわ。じゃあなづるちゃんまた明日」

「はい。じゃあ」

4・ドアは開けるときは蹴って、閉めるときは鍵で厳重に…

車から降りて家の中に入る。

「ただいまーっ！」

誰もいない。

あつても親はいるか。
って親と言えば…。

ベッドルームに向かってダッシュ。
バンッと音を立ててドアを蹴り開ける。

「あら。なつるお帰りなさい。
蹴ってドアを開けるのはよくないわよ？」

「ママの言うとうりだ、
早く謝りなさい。」

あんたらに言われる筋合いないし。
だけど今はそんなこと言っている場合じゃない。

「ねえ！ギャグシリに出演ってどういうこと！？」

「あー！。私たち許可したけど？」

「何やってんの？！」

「服はなつるの部屋だぞ。さあ。」

訳の分からないまま追い出された。

まあ、部屋行くか。

ドアを開け中に入り鍵を厳重にかけてベッドにダイブ。

「はあーーーーー」。

起き上って机の上の制服を取る。

入っていたのは『黒のシャツ』、『紫のサロペット風(?)のスカート』、『黒のフリルの付いた靴下』、『青いどくろの付いたリボンの髪飾り』。

と…男の子用の制服？

「なんで…」。

落ち着けなうる。これは多分私のじゃない。

少しサイズが大きいし。

そうか。これを贈ったのは他でもない西島さんだ。

またドジッたのだろう。

よし、メールだ。

「えっと…」

『こんばんわ。夜遅くにすみません。』

届いた制服ですが男の子用の制服も入っていました。

明日、持っていきます。』

「送信と…」

送信完了だ。

これでOKのはずだ。

よし、ご飯を食べ、お風呂に入り寝ようか。

4 ドアは開けるときは蹴って、閉めるときは鍵で厳重に…（後書き）

これからも彩番頑張るらしいから
宜しくね ♪

by なつる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2933z/>

シリーズテレビ局【ギャグな番組へ】

2011年12月17日12時45分発行